

佐村河内守「狂騒曲」一人は大きな嘘に騙される

佐村河内守の「作曲家詐称事件」は、日本社会やテレビ界の病弊を見せてくれる。JSTV（ヨーロッパ日本語衛星放送）でも放映された NHK スペシャル「魂の旋律―音を失った作曲家」を見て、筆者も早速、Amazon で「交響曲第一番<Hiroshima>」を購入した。楽曲に関心があっただけでなく、CD を購入すれば、不遇な境遇で頑張っている音楽家へのわずかな貢献になるという思いからである。CD を買った多くの人々も、同じ思いを抱いていたことだろう。ただ肝心の楽曲だが、車内の CD プレーヤーで数回聞いてみたが、後はグローヴボックスに入れたまま埃をかぶっている。全体に陰鬱で、繰り返し聞いてみようという気にならなかった。やはり聴覚障害が影響しているのかと思ったが、いずれにしても歴史に残る「楽聖」の大曲とは比較にならないというのが結論だった。専門家でない筆者にはそれ以上の感想はない。そこに降って湧いたように飛び出したのが、今回の「作曲家詐称」暴露である。

安易な番組制作

NHK スペシャルを観て、気になっていた点があった。その一つは、自宅と思われる部屋に生活臭がまったく感じられなかったことだ。家具が一つもなく、何もない部屋の壁に寄り掛かったり、布団を敷いて苦しんだりする様子は、テレビがよくやる再現フィルムのようにだった。他の部屋でどのように生活しているのだろうかと思議に感じた。

もう一つは、病魔に苦しみ、経済的にも苦しいと思われるのに、麻原彰晃のように栄養満点の体躯で、黒髪の長髪がきれいに手入れされている。風貌からも生活臭がまったく感じられなかった。

この二点は、直感的に感じたところだが、詳しい事情が分からなければ、それ以上の判断は下しようがない。

このドキュメンタリの最大の難点は、作曲に必要な用具や楽器がまったく映し出されなかったことだ。聴力を失ったとはいえ、ピアノかシンセサイザーのような楽器があり、それを片手に音を確認しながら、コンピュータで記譜しているのだろうと想像したが、そのような手段は何もないようだ。

さらに、一番身近にいる妻、あるいは音楽仲間や学生時代の友人の存在が消えていた。それほど天才なら、その天才ぶりを語り継ぐ人々がいるはずだ。物心ついてから急に音楽の

天才になることはない。幼少時からその天才的な能力が垣間見られるはずで、その音楽能力を傍証する証言がまったくなかった。人は大人になって天才に突然変異することはない。

この NHK スペシャルの企画は外部から持ち込まれたものだという。これを持ち込んだディレクターは、佐村河内の詐称に気づかなかつたはずがない。そうであれば、楽曲の音楽的価値の評価は別として、このディレクターは佐村河内作曲を詐称する作品販売の詐欺行為を行った実行者である。この番組が放映された結果、売れるはずもない「交響曲第一番く Hiroshima」の CD が 10 万枚を超えるヒットを記録して、巨額の印税が支払われた。明らかに公共電波を使った誇大広告によって、不当な利得を得た詐欺行為であり、佐村河内本人の売り出しに大きな役割を果たしたディレクターは、詐欺の実行犯である。ただし、作曲を担っていた新垣氏には、詐取の意図がないので、共犯者とは言えない。

もしこのディレクターが詐称に気づいていなかったとしたら、基本的な音楽知識や常識が欠如している。麻原彰晃のインチキを暴けなかったのと同じレベルだ。瞑想するだけで、オーケストラのスコアを書けるはずがないことなど、専門家に意見を求めれば、すぐ分かることだ。

三浦和義との類似性

詐称・詐欺事件は芸術界で日常茶飯に起きている事象である。学術の世界や政治の世界でも、代筆、盗作、統計操作はそれほど珍しいことではない。今回の佐村河内詐欺事件はテレビ媒体を使った詐欺事件という点で、他の事件と区別される。

これとよく似た事件は、三浦和義のいわゆる「ロス銃撃殺人事件」である。この事件では、夫人の遺体を乗せた米軍ヘリが到着する様子をテレビが映し出し、三浦本人が発炎筒を掲げて、ヘリを誘導していたのを覚えている。だいたい、軍人でもない三浦が、いかに本人の強い要請によって米軍の輸送支援を受けたとはいえ、米軍ヘリを誘導するのはあまりに演技じみている。そこにはたんに殺人事件を隠蔽（いんぺい）する意図を超えて、凝りに凝ったシナリオで自らをもっと大きく見せたいという尋常でない欲望を感じさせる。もっとも、三浦事件は殺人事件で、佐村河内事件は詐称による経済的詐欺事件だという基本的な相違はあるが、虚言癖があって自らを誇大に見せ、利得を得ようとした点は同じである。

それにしても、佐村河内は三浦にも劣らない演技派である。サングラスをかけて眼の動きを見せないようにし、腱鞘炎だからピアノが弾けないと手首にサポータを付け、杖までついて歩き、麻原彰晃を真似たような黒装束でカリスマを装い、寒い三陸の浜辺で何時間も瞑想し、発作で部屋を蠢く演技までするなど、手が込んでい。もっとも、そういうロールプレイが、いつの間にか飯の種を生み出す仕事になったのだろう。麻原彰晃の演技から多くを学んだに違い

ないが、眼が見えない想定よりは、耳が聞こえない想定にした方が、作曲詐称に都合がよいし、日常生活を送るのに便利だと考えたのだろう。

文化と知性の劣化

大晦日に JSTV で「2013 年紅白歌合戦」を通して見たが、少女のグループが次から次に、意味不明瞭な歌で、踊って見せるものが多かった。AKB48 に代表されるようなグループを追いかけているのは中学生か高校生だと思っていたら、いい歳をした社会人男性だという。

この種の安易な風俗文化が幅を利かせ、テレビではお笑いタレントが内輪の話題で騒いでいる。いつの時代にも、クラシック音楽のような頭を使う文化はなかなか一般庶民の文化にならないが、日本のようなガキタレ文化が蔓延している国では、文化的価値を判断する能力が劣化し、本物と偽物を区別する社会的能力が失われている。

クラシック音楽は学術的文化で、それなりの訓練や準備なしに簡単に参入できる分野ではない。なかでも、オーケストラ曲の作曲には膨大な音楽知識が必要とされるだけでなく、音楽家としての感性や才能が要求される。和音（コード）でしか演奏していないロックのミュージシャンが真似のできる仕事でないことはもちろん、佐村河内のようにボーカルしかやったことのないミュージシャンには想像もできない世界だ。もし NHK スペシャルが佐村河内の音楽歴をきちんと追跡していれば、楽曲作曲能力がないことは簡単に分かったことだ。しかし、彼の生活史や音楽史を顧みることなく、この番組が構成された。視聴者は佐村河内にクラシック作曲の素養や知識があるという前提でしか番組を見ていないのだから、番組だけで嘘を見破れなかったと専門家を非難するのも間違っている。

それにしても、佐村河内は瞑想からクラシック楽曲が作曲できると演じ、家には五線譜とペンしか用意していなかった。ここにロールプレイの最大の欠陥がある。楽曲の作曲も、歌謡曲や風俗小説の原稿を書く程度のことだと思っていた節がある。佐村河内は楽曲作曲の難しさを想像することすらできなかったのだろう。

問題は、佐村河内に群がったメディアがこの単純な嘘すら見破れず、佐村河内と同じレベルでしかクラシック作曲を考えることができなかったことだ。AKB48 レベルの大衆文化しか追っていないメディアには、最初からオーケストラ楽曲を作曲する難しさに考えが及ばず、演技の最大の欠陥を見抜けなかった。佐村河内とメディアは「同じ穴のムジナ」ということか。

なぜ人は大きな嘘に騙されるのか

人はバーゲンセールのような小さなお金に右往左往するが、大きなお金の支払いにそれ相応の時間をかけることはない。「振り込め詐欺」にしても、金額が小さいより大きい方が騙されやすい。身近な殺人事件は一生忘れないが、国家が起こした大規模殺人などは他人事だから、すぐに忘れてしまう。

さらに、経済が発展するにつれ、社会の分業も広がり、他人の職業を想像したり、社会を全体的に捉えようとする認識力が衰えていく。社会が豊かになるにつれて、生産者と消費者の接点が遠のき、その役割分化が顕著になる。生産することの苦勞を知らない、「ほとんど消費するだけの人」が増える。贅沢な消費生活を享受する者が必ずしも社会に役立つ生産活動に貢献しているわけではないし、勤勉さや能力が個人的な経済的豊かさを生み出すものではない。逆に、社会にとってほとんど役に立たないか、有害な働きをしている者が豊かな消費生活を送ることもある。消費者が生産者の苦勞や苦しみに思いをはせることができなくなっている。

このように経済的に発展した社会では、生産活動や学術・芸術活動の難しさを知る機会も少なくなり、若者の層に、それほど努力しなくても大きな成果を達成できるのではないかという安易な幻想を生み出す。しかも、その幻想が現実になることもあるから困る。デイトレーダーのような、社会的に不毛な短期的な金融投資などは、そういう幻想を現実にしてくれる。

しかし、何時の時代においても、真の創造活動は血のにじむような努力や才能の全面的な發揮なしには成就しない。歌謡曲やロックの作曲はそれほどの努力なしに、ある程度の感性があれば可能だが、クラシックの楽曲の創造はそういう訳にいかない。長年の勉学や技術の習得、才能の開花なしに達成できない性格のものだ。嘘で固められた佐村河内の生活から想像もできない世界なのだ。テレビ番組制作者にとっても、理解不能な世界だったのだ。

時代はますます本物の価値を知ることが難しくしている。人々は自分が理解できる範囲や基準でしか、物事を理解できない。だから、いつも真の価値を捉えることができず、偽の価値に踊らされて生きていく。佐村河内が与えた経済的損害など僅かなものだ。それよりも、為政者の政策が与える影響の方がはるかに大きい。「アベノミ(ツ)クス」なるイデオロギーがもたらす円安被害や、金融緩和策がもたらす将来の災禍は、消費税 3%の引上げて比べものにならないほど大きい。しかし、人々はそれを見抜くことはできず、3%の消費税引上げだけに騒いでいる。佐村河内の詐欺など、為政者の詐欺的イデオロギーに比べれば、かわいいものだ。

今の社会、真の価値（本物）や真の問題（本当の問題）を捉えることは難しい。佐村河内「狂騒曲」はいろいろなことを考えさせてくれる。